教科等や分野名：特別支援教育

「対話的な振り返りを通したセルフアドボカシースキルの獲得を目指して」
―自己理解の表出を促す問い掛けの視点―

弥彦村立弥彦中学校
氏名　倉田　彩子　H１２年度

（主張）

セルフアドボカシーとは、自らの特性やニーズを理解し、適切な支援を周囲に求める力である。通級指導教室において生徒がこの力を獲得・発揮するためには、生徒自身が自己に対して「問い（自己に関する行為・事柄に焦点を当てた疑問)」をもち、自己理解を深めていくプロセスが不可欠である。しかし、生徒が自力でこの力を身に付けることは容易ではない。

そこで本実践では、生徒の自己理解を促しセルフアドボカシースキルの獲得へつなげる手立てを検討した。その結果、生徒が自己に関する行為・事柄に焦点を当て、「問いをもつ → 分析する → 気づき」という探究的な思考を促す関わりが有効であると捉えた。教師は生徒との対話において、生徒自身が自分に向ける「問い」を生み出せるよう、意図的に「6 つの問い掛けの視点」や「4 つの分析ポイント」を持って関わることが重要である。この「対話的な振り返り」を重ねることで生徒の自己理解が着実に深まることが実践を振り返ることで分かった。

ASD 傾向のある生徒への実践事例では、「なぜ宿題ができないのか」という自己への問い掛けから、「自室では気持ちが切り替えられない」という自己理解へ導き、「リビングで学習する」「親に管理を頼む」といった具体的な支援の依頼（セルフアドボカシー）へとつなげることができた。

生徒との対話において意図的な視点をもって関わり、自己への問いから自己理解を深めさせることが、セルフアドボカシースキルを発揮させる有効な指導手立てであると提案したい。